資料５

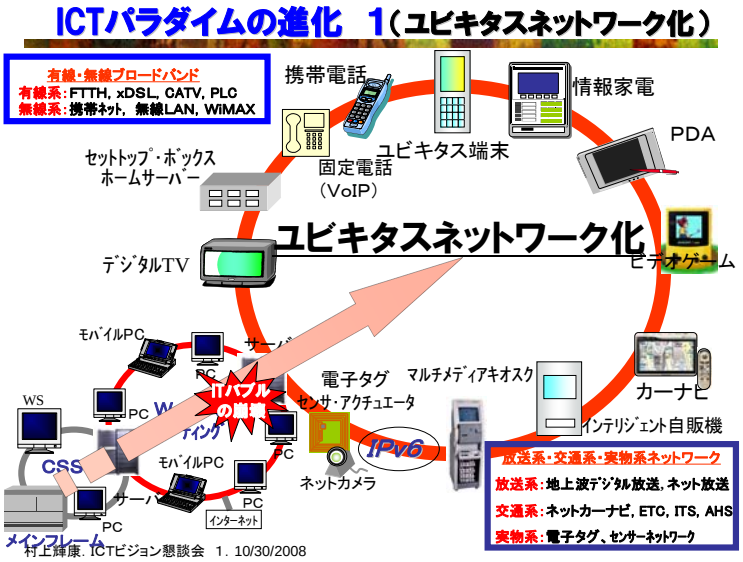
第一回　ＩＣＴビジョン懇談会への意見

野村総合研究所　シニア・フェロー　村上輝康

第一回のＩＣＴビジョン懇談会の９月 30 日は、以前からソウルで開催されるＵ－Ｃｉｔｙ２００８という国際会議での基調講演が決まっていましたので、出席できません。下記を、私の意見として提出させていただきます。

1990 年代に爆発的に普及したインターネットは、1980 年代から進行してきた日本の情報化における情報と通信の融合を決定的なものにしました。この変化によって、世界中のあらゆるＰＣが瞬く間にひとつに繋がっていき、これまでとは全く異なった情報空間が生み出されました。この変化があまりにも壮大だったため、それは同時に、米国のベンチャー企業やネットワーク事業者の成長への過度な期待の膨張による、いわゆるＩＴバブルをも生み出しました。

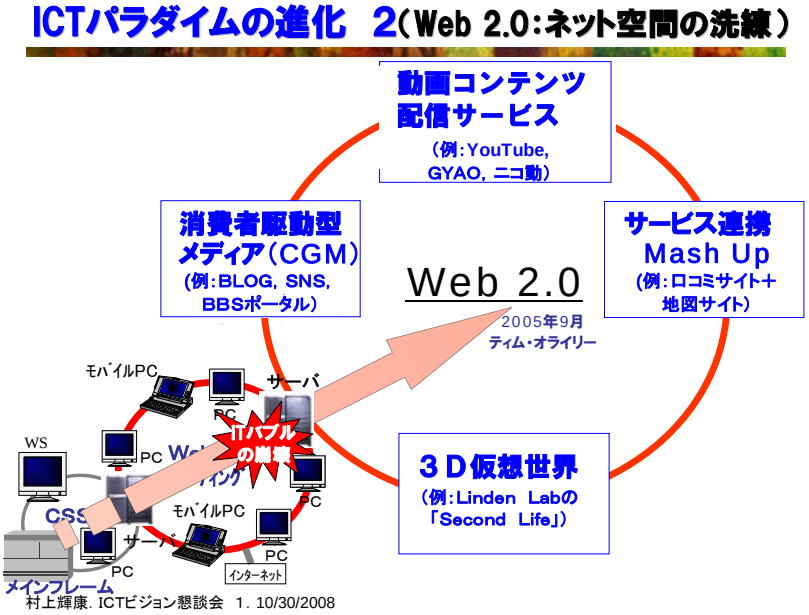
当然、バブルは崩壊した訳ですが、それは、一時的にＩＣＴの世界にパラダイムの真空状態を生み出しました。その真空の中からまず生まれてきたのが、ブロードバンド化という方向性だったのですが、その進展の上にたち、日本と韓国で大きな流れになってきたのが、ユビキタスネットワーク化でした。



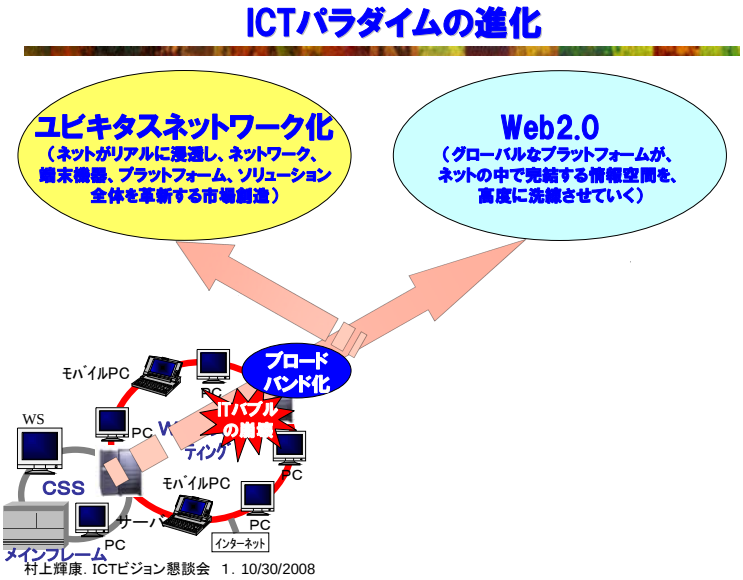
日本のＩＣＴ戦略は、このふたつの流れを捉まえて、これまでブロードバンド化、ユビキタスネットワーク化を強力に進めてきました。これによって、世界最先端の光ファイバーネットワークやＮＧＮの整備、高度なサービスを伴う携帯電話ネットワーク、放送のデジタル化、ＲＦＩＤの利活用の推進、センサーネットワークへの取り組み等が進んできまし

た。

そのような中で、90 年代のインターネットのイノベーションは、2000 年代の後半に、再度、ブログやＳＮＳのような CGM、Google の高度な検索ー広告システムや、YouTube、セカンドライフのような新しい動画ベースのプラットフォームの隆盛を背景に Web2.0 という形で、米国において、新たなＩＣＴビジョンの流れを生み出しつつあります。

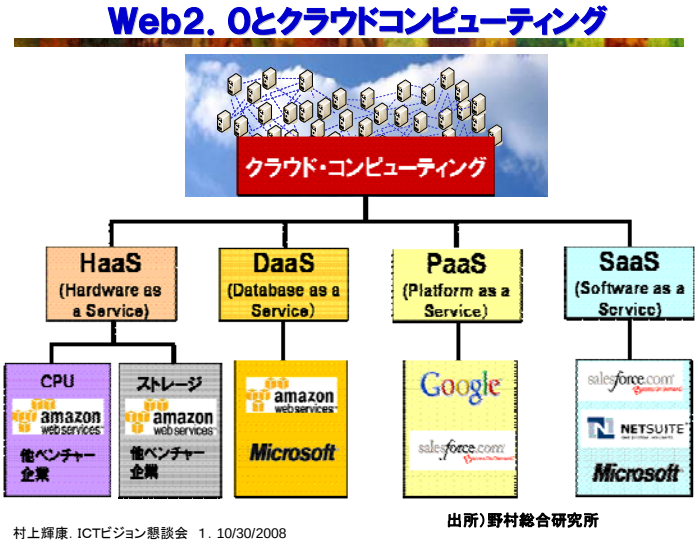


つまり、現在、ＩＣＴの世界では、様々なグローバルなプラットフォームが、ネットの中で完結する情報空間を高度に洗練させていく Web2.0 という方向性と、ネットが人々の生活やビジネスの場というリアルワールドに RFID や携帯端末で直結していくユビキタスネットワーク化という方向性が混在しているという状況にあります。



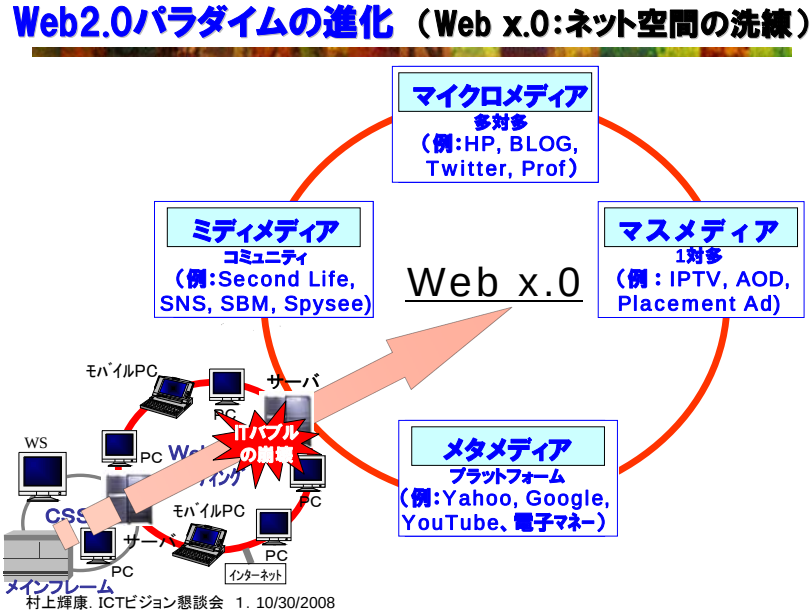
日本において、これからのＩＣＴビジョンを考える時には、グローバルな情報空間をさらに発展させていく「Web x.0」という方向性に適切に対応していくという方向性とともに、世界で最も深刻な少子高齢化に突入しようとしている社会システムの生産性を、ネットとリアルワールドの直結によって、抜本的に向上しようとするユビキタスネットワーク化の具体化という方向性の定着に手を抜くべきではありません。

米国がイニシアティブをとりながら、進行していく「Web x.0」のパラダイムにおいては、今後、クラウドコンピューティングや、SaaS さらには、PaaS、 DaaS という概念を定着させることによって、ソフトウェアだけでなく、データベースやプラットフォーム等、あらゆるＩＣＴの要素を、（米国主導の）ネットワークの中で実現する動きが進行していくと思われます。当面は、このような動きを日本語環境のなかで、遅れなく実現していく取り組みが必要ですが、そのようななかから、グローバルな情報空間でも通用するプラットフォームの出現を期待したいところです。

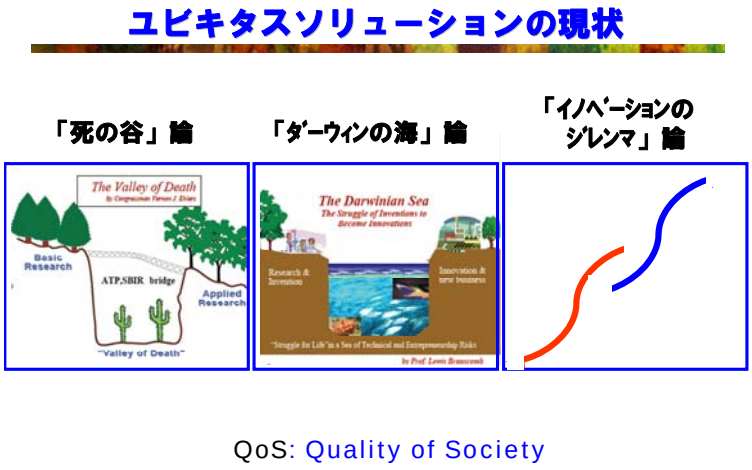


この「Web x.0」のパラダイムのなかで、大きく変化するのがメディアの世界です。インターネット出現以前のテレビというマスメディア主導のメディア環境は、インターネットによって急速に変化しつつありますが、今後のメディア環境は、マスメディア対インターネットという構図を越えて、地上波デジタルにＩＰＴＶが加わるマスメディアと、ブログやTwitter のようなマイクロメディア、ＳＮＳやＳＢＭのようなミディメディア、そして圧倒的な牽引力をもつメタメディアがせめぎあうかたちになっていくと思います。情報と通信の融合に対して、通信と放送の融合はすでにメディア空間のローカルな問題になりつつあります。通信と放送の融合も素早く進めないと、現在のテレビに対するラジオのような状況に、テレビがなってしまうのを防ぐことができなくなります。また、携帯電子マネーは、

グローバルなプラットフォームになりうるポテンシャルを持っていると思いますが、これが実現すれば、英語でなく電子マネーを言語とするグローバルプラットフォームが日本発で出てくるかもしれません。

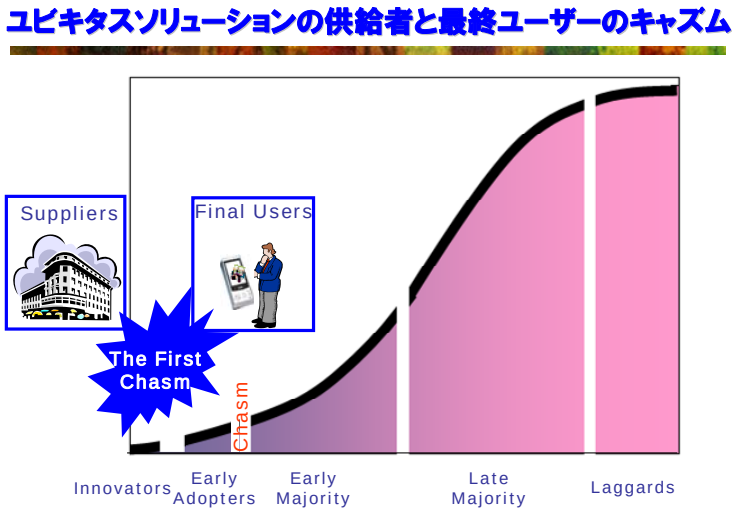


もうひとつの方向は、ネットワークのリアルワールドとの融合をもっと強力に推進していく「ユビキタスネット社会の実現」という方向です。これまでの u-Japan 政策の推進や、他省庁でのユビキタスネットワーク化への取り組みによって、日本のユビキタスソリューションは、いわゆる研究開発の「死の谷」を越え、「イノベーションのジレンマ」にも陥らず、これから「ダーウィンの海」に漕ぎ出そうとしているところだと思います。



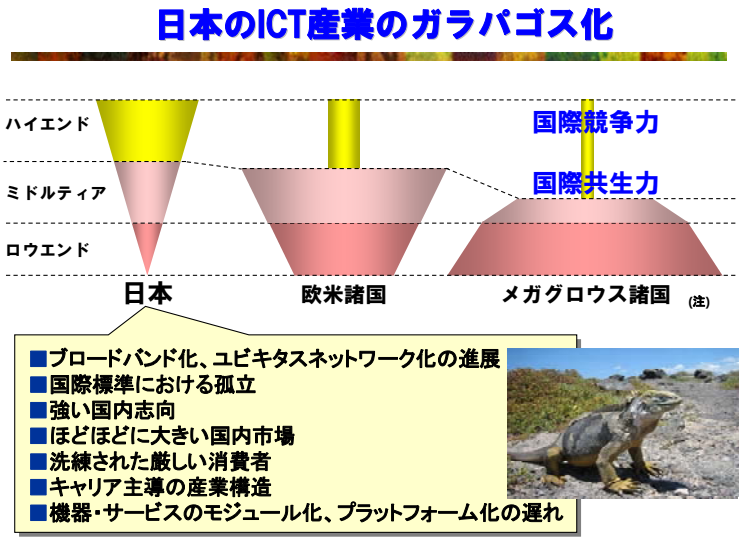
現在、ほとんどのユビキタスソリューションは、多くの実証実験やモデル事業による技術

的なフィージビリティの実証を終えたところだと思いますが、その情報は、まだ、研究者や企業、官庁といった供給サイドのコミュニティで共有されているだけで、十分最終ユーザーには伝わっていないのが現状だと思います。この供給サイドと最終ユーザーの間のキャズムを埋めていくのがユビキタスネット社会実現の重要なステップになります。



Source) Geoffrey Moore, Crossing the Chasm, 1991を村上修正。
村上輝康. ICTビジョン懇談会 1. 10/30/2008

ＩＣＴ産業という視点からは、今後のユビキタスソリューションの定着過程では、これまでの日本のＩＣＴ産業のガラパゴス化の反省を踏まえて、常に、国際的な最終ユーザーに対する可視性という視点を忘れるべきではない、ということを最後に強調しておきたいと思います。



注）メガグロウス諸国とは、人口数千万から1億人程度以上で、高い経済成長を達成しようとしている諸国
村上輝康. ICTビジョン懇談会 1. 10/30/2008